

表紙モノ語り

僧侶用水筒

国名：ブータン 1984年収集
標本番号：H0126695

くりた やすゆき
栗田 靖之
民博 名誉教授

2003年に退官。現在は「日本ブータン友好協会」の顧問として、ブータンとの親善に尽力している。

ブータンは、けわしいヒマラヤの南斜面にある山国で、パロや首都ティンプーといった主要な町は、標高が二四〇〇メートルほどの高さに位置している。

この国では、山の上のずい分高いところにまで白壁の堂々とした民家が点々と建っている。東に行くほどその傾向が顕著である。ひとつの理由は、低地や東ブータンの谷筋には、夏にはインド平原からの熱風が吹きつけマラリア蚊もいる。そのマラリアを避けるために、水の不便な尾根住まいをするようになったということである。

このような事情のほかに、ブータンでは、世俗を離れた断崖絶壁の中腹や眺望の良い尾根の上に僧院を建てていることが多い。それは僧侶が、修行としておこなっている瞑想めいそうに雑念が入らないような場所を選ぶからだという。しかし気にな

るのは、そんな場所で水はどうしているのだろうかという疑問である。僧院には大きな仏壇があり、仏さまの前には毎朝、いくつもの容器に入った闍伽あかとよばれる水をお供えしている。

あるとき、山の上の僧院に向かう村人に出会った。その人は背中に籠かごを背負っており、そのなかには太い竹で作った何本かの水筒が入っていた。この村人は僧院に水を届けるのだという。僧院のお坊さんに水を届けるのは、わたしのせめてもの供物だと話していた。この人は、僧院に水を届けることで功德を積んでいたのである。

ここで取り上げられた容器は、お坊さんが用いる水入れで、なかなか立派なものである。普通の人はこのような立派なものを入る容器にするのはもったいなくて、酒を入れる容器として用いている。

